

[書評]

シンジルト編『目で見る牧畜世界： 21世紀の地球で共生を探る』*

廣田 千恵子

はじめに

本書はアフロ・ユーラシア、南アメリカ大陸に暮らす牧畜民の歴史と文化、生業形態を取り上げながら「牧畜世界」を描き出し、牧畜民的な共生のあり方を可視化することを目的とした一書である。

本書の編者であるシンジルト氏(以下、敬称略)は社会人類学、内陸アジア研究を専門とし、これまでも中国青海省のモンゴル人における民族的自己認識に関わる研究成果⁽¹⁾や、内陸アジアに居住するオイラト人の共生の論理を描いた民族誌⁽²⁾を発表してきた。

本書の執筆には編者を含め、歴史学、文化人類学、地域研究を専門とする12名の研究者が関わっている。各執筆者名は各章の内容と共に順に紹介する。

評者はモンゴル国西部地域に居住するカザフの手芸・装飾文化を主な研究対象とし、カザフ牧畜民と生活を共にしながら、牧畜形態と技術の記録にも取り組んできた。特定の地域における牧畜しか見聞きしたことのない評者にとって、牧畜の多種多様さを存分に示した本書は示唆に富むものであった。

本書の形式は大型本で、全162頁、カラー版である。本書の構成は大きく3部に分かれている。そのなかには、現地と長く関わりをもつ研究者によって綴られた10のエッセイとコラム2編、資料、そして豊富な民族誌写真が含まれている。以下では、まず本書の構成と内容を順に紹介し、次いで本書の特色について述べる。

1. 本書の構成

本書のはじめには総説(シンジルト)があり、本書を読み進めるための指針を読者に示している(5-10頁)。ただし、本稿ではその内容については、後述する本書の特色と合わせて

*シンジルト編『目で見る牧畜世界：21世紀の地球で共生を探る』風響社、2022年。

(1)シンジルト『民族の語りの文法』風響社、2003年。

(2)シンジルト『オイラトの民族誌』明石書店、2021年。

DOI : 10.14943/jbr.13.187

述べることにする。

1.1 第1部：平原を駆ける

第1部は、牧畜民が生きた過去の世界と現代を繋ぐ三つの章と、一編のコラムによって構成されている。各章をつうじて近代以降、あるいはそれ以前のような牧畜を営めなくなった人々の中に確かに受け継がれている牧畜民としての気質や記憶といったものを探る。

第1章(秋山徹)は、天山山脈を舞台に興亡を繰り広げた牧畜民、なかでもキルギス、カザフの歴史と、今日における人々の姿を描き出している。

中央アジアの牧畜民はこれまでに他者からの支配と、それに伴う大きな社会変容を経験してきたが、持ち前の強さとしなやかさによって様々な困難を乗り越えてきた。本章をつうじて、そうした牧畜文明のレジリエンスが現代を生きる人々の嗜好や機動力、牧畜文明の表現のあり方の中に、確実に受け継がれていることが示されている。

第2章(井上岳彦)は、ロシア帝国、ソ連、ロシア連邦を経験したカルムイクにおけるウマの飼養の変化について、古写真を豊富に取り入れながら考察している。

牧畜民のウマへの愛情は深い。社会的な飢餓、内戦によるステップの荒廃や早魃といった様々な困難に見舞われながらも、人々のウマへの愛は変わらなかった。一方、近年のカルムイク社会において、効率を重視する傾向や、若者の牧畜離れといった社会全体における価値観の変容が、人々とウマとの距離を変えつつある様子も否めない。

第3章(岩本佳子)は、オスマン朝や現代のトルコ共和国の歴史と牧畜民との関わりを考察し、とくに牧畜民の記憶の語り継がれ方に焦点を当てている。

現代において季節移動どころか定住牧畜すら営まれなくなりつつあるトルコにおいて、それでもなお牧畜の記憶や伝統は暮らしの中に確かに息づいている。オスマン朝という前時代を捨てざるを得なくなった人々にとって、牧畜は「祖国の栄光の歴史」であり、現代社会においても像や装飾、建築物、イベントを通じて度々人々の記憶に語り掛けている。

第1部のコラム(中野歩美)は、インド・タール砂漠の移動民ジョーギーという、牧畜とはほぼ無縁の生活を送ってきた人々にとって、彼らなりの牧畜とはいかなるものであるか、生活風景を映した写真と共に示している。

1.2 第2部：極限に暮らす

第2部は、自然的・社会的制約のある環境下において、牧畜を営むことが果たした役割と、その意義について考察する三つの章と、一編のコラムが取められている。

第4章(地田徹朗)は、カザフスタン・小アラル海地域を事例として、カザフ人によるラクダ牧畜が自然災害からの復興において果たした役割について述べている。

人間による開発行為によって引き起こされたアラル海の自然災害をうけて、漁業を営め

なくなった住民たちは、漁業から「ラクダ牧畜」を営むようになった。ラクダは水が少ない地域でも飼育可能な家畜であり、また同地域のカザフ人の中にはもともとラクダ飼養の基盤が存在していた。本事例は、牧畜がもつ柔軟なレジリエンスが地域の社会・生態システムの更新に大きな役割を果たしたことを示す好例といえよう。

第5章(宮本万里)は、ヒマラヤ東部ブータンのヤク牧畜民が、厳しい居住環境下を生き抜くために、様々な形の越境性を身につけていることについて取り上げている。

高地と低地が生み出す両極端な生態環境を行き来する牧畜民たちは、牧畜の継続を可能にするため、生態学的な境界を越えて、低地にも高地にも適したヤクの間種を生み出した。彼らは生業の境界も越え、農耕民と社会・文化的交流をもつほか、低地では自ら農耕も営む。さらに、国境を越えて宗教的つながりを共有するなど、環ヒマラヤ地域に生きる人々は多様な境界を往還することで、他者と一つの生態文化圏を生み出している。

第6章(佃麻美)は、グローバル化の影響を受けた今日のアンデス地域におけるアルパカ飼養について述べている。

過酷な南米の環境に適した家畜として飼養されてきたアルパカとリャマであるが、グローバル市場とのつながりの中で、とりわけアルパカ毛に対する需要が高まっている。積極的な品種改良もおこなわれており、アルパカ毛による利益は牧畜民の重要な収入源となっている。彼らは山と町を往復しつつ、今日も誇りをもって牧畜を営み続けている。

第2部のコラム(上村明)は、モンゴル牧畜民の搾乳という家畜の母子関係への介入技術に着目し、搾乳をつうじて家畜と人間の間心のつながりが生まれゆく過程について、豊富なフィールド写真と共にリアルに描き出している。

1.3 第3部：遊牧を生きる

第3部では、四つの章をつうじて、牧畜民にとっての遊牧・牧畜がいかなるものであるかを探りつつ、彼らの生き方から得られる様々な学びを示している。

第7章(田村うらら)は、20世紀前半までに大部分が定住化したとされるトルコ遊牧民ユルックについて、今なお小家畜群を連れて移動を続ける「現役ユルック」について取り上げている。

ユルックの移動形態は高低差のある夏営地と冬営地の往復であるが、そうした移動の動機が地理的要因だけによるものではなく、彼らの身体に染み付いた記憶や特別な感情によって促されたものであることを、人々の生き生きとした表情の写真と共に伝えている。

第8章(波左間逸博)は、ナイル遊牧民のライフヒストリーを描いている。

ドドス人とトゥルカナ人は200年以上に渡って家畜略奪で鎬を削ってきた関係にある。争いの中でウシを失い、自身の身体も負傷し、心を閉ざしていたドドス人青年は、一羽のキバシウシツツキをきっかけに再び立ち上がる。彼の姿は、日々ののちと向き合い自然と

共振しながら生きるナイル遊牧民の人と動物との共生のあり方を我々に示してくれる。

第9章(田川玄)は、エチオピア牧畜民社会において八年に一度おこなわれる老人式に着目し、老人式のおこなわれ方の記述をつうじて、その中で牧畜民の願いが儀礼具や儀礼そのものに象徴的に示されていることについてふれている。

老人式は過去20年の間にやや様変わりしたものの、それでもいつの時代も牧畜民が天の神へと願うことは、人と家畜の豊饒であるということに変わりはない。

第10章(シンジルト)は、オイラト系牧畜民を事例として、牧畜民的な共生とはどのようなものであるかを述べている。

論中では異なる種を横断する共生を「一般共生」、同じ種内における共生を「限定共生」とし、屠畜・ツェテル実践⁽³⁾・通婚・擬制親族関係などの事例を交えながら、二つの共生が牧畜民にとって表裏一体の現象であり、彼らがあらゆる明確な境界を認識しつつも、その超越をおこなっていることを明らかにしている。

2. 本書の特色

2.1 多様な種が共生して織りなす牧畜世界

本書の特色・見どころは、本書のタイトルに集約されている。

まずは、「牧畜世界」という言葉に着目したい。本書でいう「牧畜世界」とは、牧畜社会において、人と家畜、草原といった人間ならざるものが相互作用の中で織りなしている世界を指している(7頁)。

牧畜研究においては、「遊牧」、「牧畜」、「移牧」といった言葉の定義や類型について、移動形態や環境に着目しつつ、議論がなされてきた。

たとえば、評者のフィールドに関連するモンゴル牧畜研究においては優れた民族誌が多数記述されてきたが、主に当該地域における社会・経済的变化によって生じた牧畜技術・形態の動態の記述と分析に関心が寄せられてきた。

他方、本書では各地域における牧畜のあり方を描きながらも、「牧畜」という言葉の定義をあえて定めず、時代・地域を越えて広く「牧畜世界」と表現され得るものがどのようなのか、という問いかけをおこなっている。

それは、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロに代表される、「他者を他者とそれを取り巻く環境の中で位置づけ、多様な人間性の理解を重視する」(6頁)といった存在論的人类学にみられるアプローチをふまえたものであり、牧畜の多様性を見つめ直す上で不可欠な視点であるといえよう。

こうした視点に基づき、本書の中では、かつて牧畜を生業としていた、あるいは元々

(3) オイラト社会においてツェテルとは、「牧畜民が何らかの理由で特定の家畜を屠らず売らず天寿を全うさせること」を指す(137頁)。ツェテルは「セテル」ともいわれる。

牧畜を営んでいなかった人々にとって牧畜とは何か(第1章、第2章、第3章、第1部コラム)、もはや移動を必要としない人々がそれでもかつてのように移動しようとする原点とは何か(第6章、第7章)、牧畜民にとっての変わらぬ願いとは何か(第9章)といった、牧畜世界の核となる部分に迫る内容がつつられている。

そして、本書におけるもうひとつの重要な視点は、牧畜世界に備わっている「共生」のメカニズムである(7頁)。

「共生」というテーマは文化人類学において、民族、ジェンダー、宗教、国境、言語など様々な視点から取り上げられてきた。しかし、その多くは人と人との関係の中での共生を対象としていた。

本書で着目する牧畜世界における共生のあり方とは、人と人との関係に限らない。むしろ、牧畜民にとって人同士の共生の形の基盤となっているのは、動物や自然そのものといった人以外の種との共生である(第10章)。それは、普段から人間以外の相手と呼応し、あらゆる生命と向き合う彼らゆえの共生の形ともいえる(第8章、第2部コラム)。

共生関係を築く上での条件のひとつには、自己の存在を規定する境界を越えることが挙げられる。牧畜民が「越境」するものは、生態系、自然環境、国境、思想、生業、民族など、一言では捉えきれない(第5章)。そうしたあらゆる境を越えるということ、すなわちあらゆる環境に対する柔軟性をもつということはまた、社会・生態システムを構築・更新させることにも繋がっていく(第4章)。

しかし、こうした牧畜民の持つ共生の感覚とは、長期的なフィールド調査をつうじて現地の人々の生活の中に溶け込みながら、長く対話を繰り返すことによって初めて近づくものであり、文字や数値では到底示しきれないものである。しかしながら、そうした課題をふまえつつ、牧畜民の持つ共生の感覚を可視化するために本書が活用したものが、「民族誌写真」という手段である。

2.2 人文研究における民族誌写真の意義と可能性

タイトルに「目で見る」とあるように、本書の最大の特徴と魅力は、豊富な民族誌写真の使用にあるといえよう。

人の感情やそれへの反応といった、文字では伝えきれない微細なものの積み重ね、すなわちマリノフスキーがいうところの「不可量部分」を読者に示すために、編者は「民族誌映像」という手段に着目し、本書においてはとりわけ「写真」という手段を採用した(8頁)。

そのため、本書では各章の文中に写真が挿入されているのは勿論、章の終わりに複数の写真とキャプションが続く。それらの写真は筆者たちが直接現地で撮影したものか、歴史的資料からの古写真である。

写真を用いた学術的アプローチは、人類学分野においてはこれまでもその意義に関す

る議論や、活用に向けた取り組みがなされてきた。

たとえば、日本を代表する人類学者である梅棹忠夫は、かつて民族誌写真の定義と特徴について言及した際、その写真の技術的水準や芸術的印象が優れていることは当然望ましいが、写真の中に込められた学術的内容が豊富であることがなによりも重要であることを指摘した⁽⁴⁾。それは、写真が与えるイメージの影響力がかえって誤解を生む可能性も秘めているからである。

本書で言えば「遊牧」や「牧畜」という言葉を聞いて一般的に抱かれるイメージは想像に難くないが、その点本書では文章とキャプションをバランスよく組み合わせることによって、詳細な情報を提供することに成功している。

また、シャッターを切るときに被写体に強く意識を向けるとその対象だけを無意識に切り取った記録的な写真を撮りがちであるが、本書の中ではバランスよく様々なアングルの写真が選ばれ、掲載されている。風景に限らず、人の表情がみえる写真が多いのも、それだけ相手を知っている人が撮影していることの表れといえよう。

近年ではデジタルテクノロジーを活用することによって、写真から読み取れる情報は格段に増え、古写真利用した研究手法も進められている⁽⁵⁾。写真を介した現地社会に対する研究は今後ますます促進されていくだろう。

ただ、敢えて付け加えるならば、「不可量部分」を示す手段は当然、民族誌映像に限らない。逆に、写真を含む映像には撮影者自身の「不可量部分」が写るという点も、常に念頭に入れなければならない。それゆえに、写真以外の表現方法についても、今後の一課題として積極的に模索していきたい。

おわりに

最後に、個人的に印象に残った部分として、「牧畜民にとって共生とは境界(差異)を無化するのではなく、価値評価を付与しないことによって成り立つ」(第10章)のものである、という一言を紹介する。

現代社会に生きる人々にとって、「共生」というテーマは今日の社会問題を考える上で、不可欠な共通課題である。しかしながら、“人間同士の共生”を中心に据えた議論では、もはや我々が抱える様々な社会的困難に対応していくことは難しい。

そんな中で、あらゆる種との関係性を柔軟に読み替えていく牧畜民的発想から、我々が

(4)「梅棹忠夫と民族誌写真」『季刊民族学』122号、2007年、10-11頁。

(5)たとえば、古写真を活用した研究とその表現の一例として、2022年3月から国立民族学博物館で開催された企画展『邂逅する写真たち モンゴルの100年前と今』では、モンゴル草原における過去100年における変化を、写真の分析を中心におこなうことによって示した。ロシアの探検家によって19世紀後半から20世紀初頭にかけて撮影された写真の探索や同定作業から、生活形態の変化に限らず、土地環境や植生の密度の変化といった情報に至るまで得られるようになっている。

学び得られることは多いだろう。

評者個人としてはわずかながら牧畜民と生活を共にした中で、彼らの“調整力”に幾度となく驚かされた。人間の力ではどうにもならない相手と生きることが当たり前の牧畜民たちは、他者のふるまいを0か100かで判断することや、自分と異なる思想を持つ者に対して線引きをして切り分けていくことが、いかに無意味な行為であるかということを知っている。彼らの感覚にふれると、ふと、意識が軽くなっていくように感じられる。そして、本書もまた、読書にそうした感覚を届けてくれる一書である。

本書を牧畜とかかわりの有無を問わず多くの人に勧めたいが、世界的にパンデミックの混乱から戻りつつある中、これから牧畜世界へとフィールドワークに出ようとしている学生にはとりわけ強く一読を勧めたい。評者もまた人類学を志す者として、フィールドワークの指南書ともいえよう本書で取り上げていること、取り上げていないことに注視しながら、今後も研究に取り組んでいきたい。

なお、本書は科研「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」の研究成果の一部として発表された。同研究課題における成果物のひとつである2021年に刊行されたシンジルト・地田徹朗編『牧畜を人文学する』（名古屋外国語大学出版会）は、本書に重なる地域についても取り上げられており、本書と合わせて読むことにより一層牧畜世界へと誘ってくれるだろう。

